

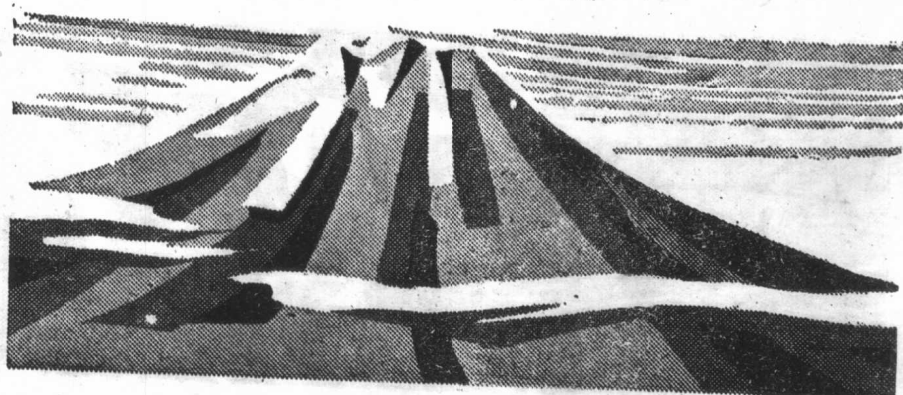
日本語學習書

日本語讀本 四

國際學友會日本語學校編

目次

一	山と旅——山路のすみれ……………荻原井泉水……………	一
二	夏季大学の効用……………都留重人……………	八
三	家庭の法律……………結婚……………川島武宜……………	一四
四	身体に関する言い回し……………芳賀矢一……………	二二
五	美しい村……………堀辰雄……………	二八
六	落葉松……………北原白秋……………	三四
七	資本主義と社会主義経済……………	四〇
八	山椒大夫……………森鷗外……………	四八



九	世界を結ぶ	湯川秀樹	七九
十	ことわざ		八七
十一	数学入門	遠山啓	八九
十二	生活と美	柳宗悦	一〇七
十三	故事から生まれた言葉		一一五
十四	世界の動き		一二〇
十五	日本人は進歩した	エドウィン・ライシャワー	一三三
	—半面にまだ残る傍観主義—		
十六	みかん	芥川龍之介	一四〇



十七 日本語の特色……………金田一春彦…一五〇

―場面に応ずることばの使いわけ―

十八 毎日の科学……………中谷宇吉郎…一六一

十九 日本人のこころ……………谷川徹三…一七二

―外人のための講演―

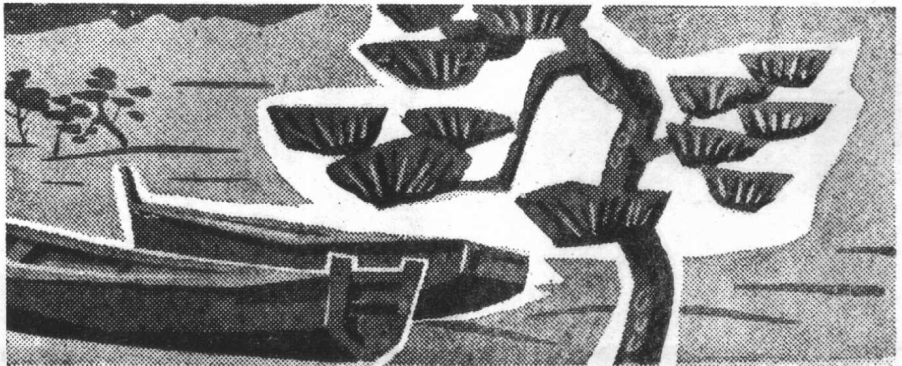
二十 木の根……………和辻哲郎…一九一

二十一 キュリー夫人……………宮津博…二〇〇

二十二 歴史の教訓を重んぜよ……………矢内原忠雄…二二五

二十三 坊っちゃん……………夏目漱石…二三九

以上



SAR65/09

一 山と旅



— 山路のすみれ —

荻原井泉水

芭蕉ばしやうの旅の空は、いつしかうらゝかな春になつていました。何日にどこへ行かなくてはならぬということはなく、たとえば、水が静かに流れていくように、あるいは雲がふわ〜と移つていくように、しぜんと足の向かう方に動いていくというのが芭蕉の旅なのです。冬から春へ自然が移るように、自分も移つていくというのが芭蕉の旅なのです。私情というものを捨てて、自然の大きな力にすっかり自分を任せきつた気持なのです。

芭蕉は、前年の秋にはじめて旅立ちしたころの気持を考えだしまし

た。

あのときは、故郷へ帰るだけの旅でさえも、自分のような病気がちの者には、はたしてしお、せるであろうか、途中でうち倒れるのではあるまいか、と心配をした。だが、すべては運命に任せよう、天意のあるがまゝに従ったら、という気持になって………それでも、かなり英断をもって出発したのでした。

さて、旅に出てみると、健康は案ずるほどのこともなかった。一日一日歩くという運動が、からだのためにたいそうよろしかった点もあるうし、また、大きな自然のふところに自分の身を託しているという気持が、精神的の安らかさをも感じさせたのでした。芭



蕉は、このままにいつまでも旅をしていたら、さぞよい氣持であろうと思うほどにさえなっていました。

またも伊賀から―大和へ―近江へ―芭蕉は、春風に吹き送られるように、春がすみに誘われるように歩いていたのでした。

世間に名の聞こえた著名な人になろう、家の名を輝かすほどの名譽を得よう、というような目的をもって努力するという氣持からは、いまの芭蕉は、もう離れてしまっていました。たゞ、真純の人間になろう、偽りのない、まことの道を歩こう、自然の心を心として生きていこう、その心から自分の文学を作りあげよう、その文学を人々の心に伝えひろめよう、というだけの一念でした。しかしそういうふうには、芭蕉が、自分をことさら偉いものに見せまいとすればするほど、芭蕉の偉いことが世の中に知れてきました。芭蕉が有名になりたくないと思えば思うほど、世間では、芭蕉を尊敬するようになりました。

芭蕉の旅は、もう半年以上になっていました。江戸のお弟子たちからは、

「いつお帰りになるのですか。私たちのことをお忘れにならぬように願います。おるすのいおりの芭蕉が、また芽をふくのも遠いことではありますまい。」

などというたよりがとどいていたのでした。

あゝ、そうだ。そろ／＼東の方に足を向けることとしよう。名古屋の人たちも、帰り道にはまた寄ってくれと言っていたし、江戸の人たちが待っている気持もわかる。芭蕉は、京都から東海道を下りはじめました。大津まで出る道に逢坂山おつかやまという峠があります。ちょうど、昼ごろにもなったので、芭蕉は道ばたの草の上に腰をおろして、ほっと息をつきました。春の太陽は、かさを脱ぎとった肩の上から、背から、投げ出した足の先まで、じつくりと包むように照らしてくれているのです。

ほかくと、ぬくくと。あゝ、ありがたい。こういうふうには、自分は自然の大きな慈悲の力の中にはぐくまれてゐるのだ。自分がそれを意識しているときも、意識していないときも、同じように太陽は自分を見守っていてくれる。仏の慈悲は、悪人でも善人でも同じように救いの手をのべてくださるというが、自然の光がすなわち仏の御徳そのものだともいえるのではないか。

芭蕉は、心のうちで、手を合わせたいような気がしてきました。と、足を投げ出してゐるその足の先を見ると、枯れくくの草の中から、小さな花が一つ咲いていました。おゝ、すみれだ。なんというかれんな花だろう。こんな山の中に咲いていて、見る人とはなないであろう。だが、すみれは人に見られようがために咲くのではない。大地もまた春になったことを、その土が自然に微笑した、その微笑こそこのすみれの花なのではないか。

それはいかにも小さな花だけれども、せいじっぱいに開いているのです。そして小さな花全体に太陽の光を受けて生きくとしてゐるのです。

このすみれの花の真純さ、この茎のすなおさ、なにを求めるといふのではなく、ただく大自然の光を賛嘆しているこの草の姿。これこそ、この地上に生きるものの正しい姿なのではないか。

そう芭蕉は感じたのでした。そうしてそのとき、芭蕉は、ふところの紙に次の一句を書いたのでした。

山路来てなにやらゆかしすみれ草



新出漢字

山路やまじ

任せるまか

倒れるたふ

託すたく

誘うま

偽りいつ

峠とうげ

脱ぐぬ

慈悲じひ

御徳おん

茎くき

問題

- (一) 旅を思う芭蕉の気持が、どんなふうにかかれてあるか。
- (二) 芭蕉は旅に出て、どういうところに心をひかれてあるか。
- (三) 「山路来て」の句を、芭蕉はどんな気持でよんだか。

二 夏季大学の効用

都 留 重 人

夏も終わりに近い。

今年の夏は、東京も異常な暑さだったらしいが、アメリカの東海岸も、それに負けぬ酷暑だった。摂氏三二・二度が華氏のちょうど九〇度で、これが暑さの程度を分類する一つのけじめになっている。日中九〇度以上の温度が二十日も続くということは、ニューヨークあたりではめったにないそうだが、今年はそれがあった。冷房のところもあるにはあるが、そうでないところも少なくないから、夏はどうしても仕事の能率が落ちる。

しかし役所や商売は、夏だからといって休むわけにいかないで、仕事は依然として続く。ただ学校だけは長い夏休みがあって、先生たちもそこで一息するのが通例である。この点は日本もアメリカも概していえば同じだが、一つ重要なちがいは、アメリカのばあい、ほとんどすべての大学がサマー・スクールを開くという点であろう。サマー・スクールと呼んでも、それは林間学校み~~な~~な休養半分ののんきなものではない。むしろそれぞれの大学の夏学期と考えたほうが適当で、じじつ大学の履修単位としては、冬学期や春学期と同

等に扱われる。

わざわざサマー・スクールと呼ばれるのには、もちろんそれ相当の理由があつてのことだ。正規の在籍学生にとって、サマー・スクールは余分である。しかし、彼らの中には、四年の学業を三年で終えようというもの、落第した学科をとりなおそうとするもの、趣味で専門外の科目を勉強しようとするもの、他の大学のふんい気を味わおうとするものなどがあるから、その人たちにとってサマー・スクールはまたとない機会を与える。しかし、それよりもすでに学業を終えて社会に出た人たちで、あらためて本気で勉強をしようとするもの、特に小、中、高校の先生たちで自分の専門をみがこうとするもの、あるいは特に優秀な高校生であらかじめ自分の実力をためそうとするものなどにとってのほうが、サマー・スクールの利用価値は大きいかもしれない。

先生のほうも、その大学のレギュラーは大体三分の二くらいまでというところが多く、サマー・スクールの機会に、よその大学の先生を招くのが通例となつてゐる。夏を機会に、東部の大学の先生が自分の郷里である中西部に帰つて、その近くの大学のサマー・スクールで教えるということもあろうし、母校を巣立って地方の大学で教鞭きょうべんをとる先生が、母校の

サマー・スクールで教えるということもある。

暑さにもかかわらず、サマー・スクールの学生は真剣である。一学期分の講義を七週間ぐらいでするのだから一つの科目につき講義は毎日一時間ずつ、月曜から金曜まで行なわれる。普通はこうした科目を二つとるのがフルタイムということになっているのだが、中には外国語のように、一年分のを七週間で詰め込むというのがあるから、それだと一科目だけで一日三時間の授業があり、授業一時間につき予習復習二時間という基準を考えると、たとえば「ロシア語入門」をとる学生など、朝から晩までロシア語の中で暮らさなければならぬ。これだと、一科目だけで超フルタイムということになってしまう。

学生が真剣なもの、それぞれに単位をとる目的がはっきりしているからだろうが、授業料を考えると、決してバカにならない。ここハーバードの例でいうなら、フルタイムの学生は、入学料を入れて二百五十ドル（七万七千四百円）を払うから、日米の所得水準のちがいを考慮に入れても、代金を払っただけのものは自分のものにするという意識が強いにちがいない。

(負)担

涼催

朗

(射)

真剣だといっても、そこはやはり真夏のことである。ハーバードのサマー・スクールでは、毎週水曜の午後、エルムの大樹におおわれた校庭で、大学の負担によるパンチ(一種の清涼飲料)・パーティーが催されるし、野外音楽、学生劇、講演会、もろもろのスポーツの催しもあるし、夏らしい朗らかさが、そこにはただよう。「サマー・スクールには女学生が多い」というのは常識だが、うまくいけばよい配偶者を射とめようという下心の男女が多いことも争えない。

楽でないのは先生である。入学試験というものがなく、ほとんどだれでもはいれるところから、一つの科目に集まる学生の学歴や素養はおそろしくまちまちで、学生が真剣であればあるほど、先生の負担は大きくなる。できない学生は特別の指導を求めてくるし、進みすぎている学生は余分の勉強をしてその相談にくる。毎日二つの講義をし、その準備をし、そのうえ数多い学生の相談にのっていると、月曜から土曜までは、たちまちのうちに暮れてしまう。

しかし先生もあまり文句をいえないかもしれぬ。再びハーバードの例でいうと、七週間の講義で通常年俸ねんぼうの二割を支給される。だから年俸が普通一万五千ドルの教授なら、夏の七週間働いて三千ドルというのだから、結構な収入というべきであろう。

潤 芝

(遊)

装

貢 献

(柔) 軟

これくらいを先生に払っても、ハーバード大学などはサマー・スクールで一もうけずらしい。今年は四千七百人の学生が登録したから、総収入はざっと百万ドル、そのうち先生たちへの給与は、せいぜい半分ぐらい、事務員の俸給やその他雑費を引いても、かなりの「利潤」をあげたようだ。サマー・スクールがなければ、大学の施設はいずれにしろ遊んでおり、芝生や建物の手入れは、どうせしなければならぬ。考えてみると、サマー・スクールとは、一種の遊休施設利用にほかならない。大学の遊休施設が利用されるだけではない。大学町にしてみれば、おかげで商売の夏枯れもなくてすみ、冷房装置のサービスくらいでは、おつりがくることだろう。

しかしそんなことより、サマー・スクールが果たす教育上の貢献は、日本など参考にする価値が十分にあると思う。近ごろトップ・マネージメント級の人たちを対象にした夏季講習は、軽井沢や箱根あたりで流行していると聞くが、夏じゅうほとんど閉鎖状態にある国立大学の施設を使って、一般好学者のためのサマー・スクールを開くことはできないのか。教育機関としてのサマー・スクールは柔軟性と集中性をその生命としているが、現在の国立大学運営方式では、柔軟性ということが認めがたい点かもしれぬ。それならそれで、固

定化した形式のほうを再検討することが要請されよう。

(米国ハーバード大学で)

新出漢字

- | | | | | | | |
|--------------------------------|------------------------------|-----------------------------|------------------------|----------------------------|------------------------|-----------------------|
| 酷暑 <small>こくしよ</small> | 華氏 <small>かし</small> | 冷房 <small>れいぼう</small> | 価値 <small>かち</small> | 詰め込む | 考慮 <small>こうりよ</small> | 負担 <small>ふたん</small> |
| 清涼飲料 <small>せいりやういんりやう</small> | 催す <small>もよお</small> | 朗らかさ <small>ほが</small> | 射とめる | 利潤 <small>りじゆん</small> | | |
| 芝生 <small>しばふ</small> | 遊休施設 <small>ゆうきゆうしせつ</small> | 冷房装置 <small>れいぼうそうち</small> | 貢献 <small>こうけん</small> | 柔軟性 <small>じゆうなんせい</small> | | |